

「メシアに属する者」

マルコの福音書 9:38～41

はじめに

マルコの福音書【新改訳 2017】

9:37 「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

前回のメッセージで、上記のこの御言葉は「**わたしの名**」すなわちイエシュアの御名によって「**受け入れる**」べきイスラエルの民、ユダヤ人の存在が指し示されていることを述べました。イエシュアのゆえにイスラエルを受け入れる、それはすなわちイエシュアがイスラエルの王なるメシアであり、彼らはその国の民、イエシュアの所有の民として神に選ばれた民、聖なる国民であるという事実を「**受け入れる**」認める、重要視するということです。しかしそれはイスラエルだけが神に愛され祝福されるということではなく、イスラエルによって、ユダヤ人たちを通じて神が地上のすべての民族、全人類を祝福されるというご計画を立てられた、約束されたためです（創世記 12:1～3）。この約束、ご計画がメシアであるイエシュアによって成し遂げられる、成就されるのだということを「**受け入れる**」、それが「**わたしを遣わされた方**」すなわちイエシュアの御父である神を「**受け入れる**」ということであると述べました。今日はその続きになります。

1. 味方

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:38 ヨハネがイエスに言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」

9:39 しかし、イエスは言われた。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。」

9:40 わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です。」

ヨハネがある人を見たと言っており、それは「**あなたの名によって悪霊を追い出している人**」であったということです。イエシュアの御名によって悪霊を追い出す人、これについてイエシュアご自身も「**わたしの名を唱えて力あるわざを行**」う人としています。ちなみにここに至る直前に弟子たちが同じように汚れた霊を追い出そうとしましたができなかったという事実がありました（マルコ 9:18）。しかしヨハネが見たその人はイエシュアの御名をもちいてその業を見事にやってのけたというのです。イエシュアの弟子である自分にできなかった奇蹟を行うその人を、ヨハネが決して快く思っていない様子が読み取れます。しかしイエシュアはその人は反対者、敵ではなく「**わたしたちの味方です**」と明言しておられます。ここ

にイスラエルと教会を結び合わせる神のご計画の体現者としてのイエシュアの姿が指し示されていると考えられます。つまりヨハネをはじめとする弟子たちがイスラエル、そしてイエシュアの御名で悪霊を追い出したその人が私たち教会を表したそれぞれの「型」だということです。弟子たちはたしかにイエシュアと行動をともにしていましたがイエシュアという御方をまったく理解せず、また尋ねることもしていませんでした。

マルコの福音書【新改訳 2017】

9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」と言っておられたからである。

9:32 しかし、弟子たちにはこのことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。

とあるように、その近くにありながらイエシュアを知らない、それゆえに信じられないイスラエルの民、ユダヤ人の姿がこの時の弟子たちには表されていると考えられます。彼らのこの状態は今日もなおそのままであり、中にはイエシュアが自分たちと同じユダヤ人であるということさえ知らない、認めない者も多々いるそうです。

一方私たち教会は、イエシュアの御「名によって」、その御「名を唱えて力あるわざを行」ってきた存在です。なぜなら私たち教会はイエシュアが神であり、その御名に神の権威があることを信じている人々の集まりだからです。しかし今日多くの教会はこのイエシュアがイスラエルの王なるメシアであるという事実、またイスラエル、ユダヤ人という存在にも、彼らの歴史の中に表されてきた神の御心、ご計画にも目をとめていません。まさにイスラエルに「ついて来なかった」者たちなのです。イスラエルと教会、そのような両者を「味方です」と言われたように、神は一つに結び合わせようとしておられ、イエシュアによってそれが成し遂げられるという神のご計画が、ここでのイエシュアとヨハネ、弟子たちの対話の中には表されていると考えられます。まさにこう記されているとおりです。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

2:11 ですから、思い出してください。あなたがたはかつて、肉においては異邦人でした。人の手で肉に施された、いわゆる「割礼」を持つ人々からは、無割礼の者と呼ばれ、

2:12 そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。

2:13 しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。

2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、

2:15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、

2:16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。

2:17 また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。

2:18 このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができます。

2:19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。

「遠くにいたあなたがた」である私たち教会を、「近くにいた人々」であるイスラエルとともに「同じ国の民」「神の家族」とする御方、それがイエシュアです。やがて再臨されるイエシュアによって建てられる「神の国」においてそれを成し遂げられます。このように、一見ヨハネの妬み、やっかみとも取れるような会話の内容ですが、そんな中にも「神の国」についてのご計画が表されており、その完成者としてのイエシュアが表されているのです。ちなみにヨハネという名は「恵む、あわれむ」という意味のハーナン (יְהֵנָה) というヘブル語がその由来なのですが、この言葉の最初の言及には、アブラハムの子イサクの子ヤコブ (イスラエル) を神が恵まれ、彼にお与えになった妻と子どもたち (創世記 33:5) の存在を指し示しており、ハーナンには本来、イスラエルにつながる、家族となる人々を指し示す意味があると考えられ、そのような意味を由来とするヨハネの名だけが、弟子たちの中で唯一ここに登場していることにもまた意味があり、決して偶然ではないということが言えるのです。

2. 一杯の水

【新改訳 2017】マルコの福音書

9:41 まことに、あなたがたに言います。あなたがたがキリストに属する者だということで、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。

ここまでの流れから、イエシュアのこの御言葉にはイエシュアの御名のゆえにイスラエルの民、ユダヤ人たちに「一杯の水を飲ませ」る教会についてのことが述べられているのではないかと考えられるのですが、ではこの「一杯の水を飲ませ」ることとは一体何を指し示しているのでしょうか。それを述べる前に確認しておかなければならないことがあります。みなさんはこの「一杯の水」の価値をどの程度に考えておられるでしょうか。私たち日本人は特にこの価値を大きく見誤り、最も低いものと見てしまいがちです。「水一杯さえ…、せめて水一杯だけでも…」冗談じゃありません！水はどんな宝石よりも、どんな強い武器よりも価値があることを知ってください。生き物にとって水は命そのものなのです。荒野を40年もさまよったイスラエルの民は、どの民族よりもその価値の尊さを理解していることでしょう。ましてやこれはイエシュアの御言葉です。水を永遠のいのち、また汚れをきよめることにたとえられる御方が、これを価値の低いものとして扱われるわけがありません。しかもイエシュアが示されたこの水は、臭い皮袋や家畜の水ぶねなどに入った水ではなく、「杯」に注がれた水なのです。ここに使われているコース(כּוּס)という言葉は本来、王にささげられる特別な杯、聖杯を意味する言葉であり、また同時にその杯を王にささげる献酌官(けんしゃくかん)の長を指し示す言葉なのです(創世記 40:11)。この献酌官とは、ただ王に酒を持って来るだけという者ではなく、常に王の側にあつてその護衛にあたる、王に最も信頼される者のみ任せられる王の側近の中の側近であり、しかもその長を指し示す言葉がこのコースなのです。ですから

イエシュアが示されたこの「一杯の水」、それは王なるメシアであるイエシュアのみぞば仕える、王に信頼され尊ばれる存在、まさに「キリスト（メシア）に属する者」の長、首長、頭、リーダーを象徴する言葉であると考えられます。

そしてまたそれを「飲ませる」という意味のシャーカー(קָרַץ)は本来、このような出来事で用いられました。

創世記【新改訳 2017】

2:4 これは、天と地が創造されたときの経緯である。神である【主】が、地と天を造られたときのこと。

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である【主】が、地上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。

2:6 ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。

この記述は「神である【主】が、地と天を造られたときのこと」を記したのですが、地上にまだ何もなく、何も始まっていなかった時「ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた」とあり、ここに聖書で最初のシャーカーが使われています。つまりシャーカーとは本来、神が地上に様々なものをお造りになる以前の、最初の状態、すなわちこれから始まる「新しい地」を指し示す言葉であると考えられます。しかしそれは美しい豊かな地というよりもむしろ何も無い地、荒れ果てたような地です。この創世記 2:4~5 にはそれがよく表されています。神のご計画とは今のこの時代、この地上の世界を終わらせ、すなわち滅ぼし、そこにメシア王国、千年王国とも呼ばれる「神の国」をお建てになり、荒れ果てたこの地上を再生させ、あのエデンの園を回復するというものです。ですからここでイエシュアはイスラエルの民、ユダヤ人はもちろんのこと、それにつながる異邦人すなわち教会もみな「キリストに属する者」すなわちメシアであるイエシュアを王とする「神の国」の民として、再生、回復された地上に生かされる者となるということが表されていると考えられます。

このように「あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人」とは、これらのイスラエルの民、ユダヤ人に対する神の選び、ご計画を理解し、これを尊重して受け入れる者のことであると考えられます。ですからイスラエルを、ユダヤ人を祝福することとは、彼らをあわれみ、何かを与えたり、手を差し伸べて助けてあげることではないのです。彼らに対する神の選び、ご計画を認めること、受け入れること、つながることなのです。祝福ならば神がなされます。そもそもイスラエルが受ける祝福とは、神が彼らの敵を彼らの手に渡され、その敵の持つ宝を分捕る、奪い取る「敵の門を勝ち取る（創世記 22:17）」ことで豊かにされるという仕組みなのです。神はご自分の他には誰にも「アブラハムを富ませたのは、この私だ」とは決して言わせないのです（創世記 14:23）。そして何より主ご自身が、イスラエルを祝福するとはこのように告白し、祈ることだと語っておられます。

民数記【新改訳 2017】

6:22 【主】はモーセにこう告げられた。

6:23 「アロンとその子らに告げよ。『あなたがたはイスラエルの子らに言って、彼らをこのように祝福しなさい。

6:24 【主】があなたを祝福し、あなたを守られますように。

6:25 【主】が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。

6:26 【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与られますように。』

このように、イスラエルを守り、富ませ、祝福するのは、あくまでも神である主ご自身なのです。

3. 報い

イスラエルを祝福する者、すなわち彼らに対する神の祝福を求め、これを願う者は「決して報いを失うことがありません。」とあるように、神からの「報い」を受ける者となります。ここに使われているサーハール(סָרְאָר)は本来、このような意味を持った言葉です。

創世記【新改訳 2017】

15:1 これらの出来事の後、【主】のことが幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

メシアであるイエシュアによって、イスラエルにつながることで私たち教会もまた等しくこの「報い」に与るのです。それは「天を見上げなさい」とあるように天の祝福です。これを神ご自身の尺度で計っても「非常に大きい」というほどのものであることを知ってください。まさに数えきれない、今の私たちの理解、常識の範囲では到底計り知れないほどの、まさに人知をはるかに超えた祝福だということです。もしみなさんの頭の中で、「神の国」とは、神の祝福とはこんな感じだろうかと思いつくもの、状態があったとしたら、実際にはそれをはるかに超えているとお考え下さい。それほどの「報い」が、将来において私たちを待っている、用意されているのです。それに比べれば、今の私たちの悩み、苦しみなど取るに足りない、まさにゴミくず程度のものであります。使徒パウロもこう言っています。

コリント人への手紙Ⅱ【新改訳 2017】

4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。

「比べものにならないほど重い永遠の栄光」、イエシュアによってもたらされる「神の国」にそれがあります。大いに期待しつつ待ち望みましょう。それに目をとめて今を生きましょう。聖霊の助けがありますように。